

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：33908

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770166

研究課題名(和文)近代日本語における逆接接続詞の発達に関する記述的研究

研究課題名(英文)A Descriptive Study of Historical Development of Adversative Conjunctions in Modern Japanese

研究代表者

宮内 佐夜香(MIYAUCHI, Sayaka)

中京大学・文学部・准教授

研究者番号：30508502

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文):本研究は近世・近代の日本語における逆接接続詞の発達を調査することを目的としたものである。主な対象は「ソレダガ」「ダケド」などの指示詞や断定辞と接続助詞を構成要素とする接続詞的形式であり、近世後期から明治期において、どのようにその形態と機能が推移したのかを明らかにした。また、このような分析の前提として、接続助詞の使用状況を精査することが重要であるため、近世上方語の逆接の接続助詞の使用実態を記述し、近世後期については江戸語・東京語との対照を行った。また、近年整備されつつある近世・近代資料のコーパスを活用し、本研究課題の成果と関連する接続助詞を指標とした文体研究を行った。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study is to investigate historical development of adversative conjunctions in modern Japanese. The main targets are conjunctions such as “soredaga” and “dakedo”, which are composed of a demonstrative, an affirmative auxiliary verb, and a conjunctive particle, and I investigated how their forms and functions changed in modern Japanese. In addition, as a prerequisite for such analysis, it is important to examine how conjunctive particles were used. For that reason, I investigated how conjunctive particles were used in the modern Kamigata Japanese, and contrasted it with that in Edo / Tokyo Japanese in the late Edo era. Furthermore, by using the corpus of modern Japanese which is being developed in recent years, I performed a study of literary styles with the conjunctive particles related to this research project as indicators.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 条件表現 逆接

1. 研究開始当初の背景

日本語の接続詞は他品詞からの転成や語の複合によって発生した形式が多く、その発達は近代語の特徴の一つと言える。そのような接続詞の発達について論じた研究として、小林賢次「狂言台本における仮定条件の接続詞「サラバ」から「ソレナラバ」へ」(『国語学』132、1983)があり、中世後期から近世における順接の接続詞「サラバ」から「ソレナラバ」への推移について論じている。さらにそれに続く時代の研究として、矢島正浩『上方・大阪語における条件表現の史的展開』(笠間書院、2013)の第 部にまとめられた一連の論考がある。これは「ソレナラ」「ソレデハ」「ソレダカラ」等、順接条件表現の形式から発生した接続詞について、近世以降の上方語、江戸語・東京語における発達過程の詳細を明らかにしたものである。

順接条件表現に関わる接続詞的形式(接続詞として一語化する前段階を考慮する場合にこのように呼ぶ)については以上のようなまとまった史的研究が行われているが、同様の条件表現のカテゴリーに入る逆接条件表現に関わる接続詞的形式に目を向けると、先行研究はあまり見られない。馬場俊臣「逆接の接続詞・接続語句」(国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究』博文館新社、2005)では明治後期の総合雑誌『太陽』に現れる逆接の接続詞的形式の推移が整理され、近代語の接続詞的形式の多様性が明らかにされている。しかし、その前時代である、近世から明治前期を対象とした逆接の接続詞的形式の総合的な調査・研究はこれまでに行われていない。本研究はこの未着手部分を埋めるものであり、これにより近代語の条件表現に関わる接続詞的形式の発達について、全体像の把握が可能となる。以上の研究動向を図示すると、図1のようになる。

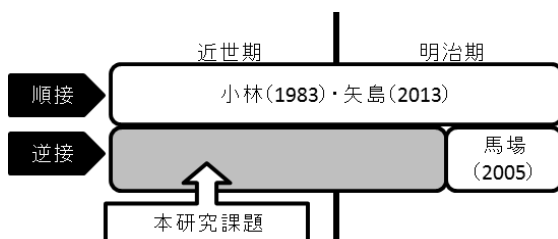


図1: 条件表現に関わる接続詞的形式の研究動向

研究代表者は宮内佐夜香「「ガ」・「ケレド」類を構成要素とする接続詞の発達について近世後期江戸語・明治期東京語における推移」(小林賢次・小林千草編『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版、2014)において、近世後期江戸語・明治期東京語の「ソレダガ」「ソレダケレド」等について、特に形態変化の問題に着目して基礎的な調査を行った。その結果、次のようなことが確認された。

- 18世紀後半～19世紀初めは(1)のような「指示詞+断定辞+接続助詞」が中心に用いられる。
- 19世紀中に(2)の「断定辞+接続助詞」や(3)の接続助詞と同じ形式がそのまま接続詞として機能しているものなど、構成要素を落とす形で形態変化した形式が増加していく。

(1)インニヤそれだが貴様のほどにはもどかぬ(噺本『聞上手』1773年)

(2)アイ有がたふ。だがどうでもう斯なるからは此土地を(人情本『春色辰巳園』四編1835年)

(3)それは確に受取りました。が、今申す通り、無駄足を踏みました日当でありますから、その日が経過すれば、翌日から催促に参つても宜しい訳なのです。(『金色夜叉』中編1899年)

宮内(2014)ではさらに、同時期の上方語の接続詞的形式の用例が確認できる先行研究をもとに、江戸語と上方語の差異についての確認を行ったが、その結果、(1)に示したような「指示詞+断定辞+接続助詞」の接続詞的形式が上方語には見られない等、形式の現れ方の東西差が発見された。接続詞的形式の発達の東西差は矢島(2013)によっても指摘されており、この点においても順接と逆接の関連性を考えるべきであることが分かった。

以上のように宮内(2014)では形態の推移と東西差の確認を行ったが、逆接の接続詞的形式の研究には、さらに次にあげるような多くの課題が見出された。

- 調査対象の接続詞的形式の機能の分析、形態変化と機能の関連性の考察
- 構成要素となる逆接条件表現の当該時期の動向との関連性の考察
- 宮内(2014)では先行研究に依拠した上方語に関する独自の調査
- 「が」「けれど」以外の形式を構成要素とする逆接の接続詞的形式の調査
- 形態変化が顕著になる近世末期から明治初期の調査の拡充

応募に先立って行った基礎的調査の結果を踏まえた上で、上記の一連の課題をクリアすることによって、第一に逆接の接続詞的形式の発達過程の詳細を明らかにすることができる。第二に、機能の分析や条件表現の動向と関連付けた考察は順接の先行研究においてすでに行われているため、これにより先行研究と連続性をもった比較考察が可能になる。以上のように考え、研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は、現代日本語において逆接の機能をもつ接続詞的形式(「ダガ」「ダケド」「ケレドモ」等)が、いかなる過程を経て発達したのかを明らかにすることを目的とする。そのために、現代語につながる特徴の発達期であると考えられる近世以降の日本語を対象に、接続詞的形式の調査を行い、その使用実

態について、形態、機能、話者属性等多面的な角度から記述・考察する。その際には、構成要素となっている接続助詞がどのような使用状況であったのかが大きく関わるため、当該時期のその動向も同時に記述・考察する。さらに上記の考察結果を、これまでに行われてきた順接の機能を持つ接続詞についての先行研究と関連付けることで、近世以降の接続詞の発達について、順接・逆接を合わせた総合的な分析を可能とすることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 近世期の実態を探るために、当該時期に成立した小説、演劇台本類の会話を調査対象とする。また、近代に差し掛かると落語の速記や録音といった音声言語をベースとした資料も利用可能である。これらの資料について、江戸語・東京語を反映した資料と上方語を反映した資料を分け、それぞれ調査対象形式の使用状況調査を実施し、採取した用例の分析を行う。江戸語・東京語、上方語それぞれの特徴分析とともに、同時代の現象についてこの二種の方言の対照という観点も取り入れて分析する。

(2) 用例の整理に際してはデータベースソフト等を用いて電子化し、各種情報を付与、分析結果の機械的な計算が可能な状態にする。必要に応じて全文コーパスを作成し、調査対象形式の効率的な採取や、全体像の把握に役立つようなデータベースを作成する。

4. 研究成果

(1) 1. 研究の背景で述べた「調査対象の接続詞的形式の機能の分析、形態変化と機能の関連性の考察」及び「構成要素となる逆接条件表現の当該時期の動向との関連性の考察」という課題をクリアするために、江戸語・東京語資料について、逆接の接続詞的形式「ソレダガ」「ソウダケレド」「ダケド」等の調査を実施し、用例の採取と機能の分析を行った。資料は江戸版洒落本、滑稽本、人情本、明治期の小説類である。その結果、近世後期から明治前期にかけての形式の推移が明らかになった。まずは構成要素のうち、接続助詞由来の部分は、当該時期の接続助詞の出現傾向と連動している。全体としては、上方語由来の旧来形式「シタ」系・「シカシ」の使用が中心であったところから、「シタ」系が衰退し、指示詞系の接続詞的形式が増加する。その背景として、「シタ」系の機能が明確な逆接を表さない文標識的な傾向となったことで、逆接の新形式が発生したという見解を示した。さらに、指示詞系から指示詞や断定辞が脱落し、短縮形式が増加していく。短縮形式が増えると文標識的な使用が多くなってはくるが、ただし、それぞれの接続詞的形式の持つ機能は、構成要素となっている逆接の接続助詞の機能と明らかに連動しており、割合としては文標識的に用いられる例

はあまり多くないことが分かった。また、構成要素に「ソレ」や「ソウ」等の指示詞を含む場合の機能の差について言及し、「ソウ」系の方が文標識的に用いられやすいことから、「ソウ」系の形式で特に指示詞の脱落が起こり、「ソレ」系は残存した可能性について言及した。この成果は5. 主な発表論文等の〔学会発表〕として発表した。

(2) 江戸語・東京語と上方語の対照を行うために、接続詞的形式の構成要素となる接続助詞の状況を精査する必要がある。そこで、これまでの逆接条件表現研究の知見を、江戸語・東京語と上方語の対照という観点で整理し、未だ追究されていない問題点を明らかにすることをまず行った。問題点としては、逆接の接続助詞が同時に持つ話題提示の用法の実態調査が上方語においては見られないこと、近世後期上方語を一括した分析は見られるが、その間に起こった変化への言及は見られないこと等があった。そこで、江戸語と時代を同じくする近世後期上方語の逆接の接続助詞について分析し、すでに分析を終えている江戸語の接続助詞との対照を改めて行った。資料は上方版洒落本、滑稽本、江戸版洒落本、滑稽本、人情本である。その結果、江戸語では「ガ」中心で、上方語では「ガ」はあまり伸張せず「ドモ」と「ケレド」「ケレドモ」(以下「ケレド」類)中心であるといった異なる特徴が明らかになった。同時に、「ケレド」類の増加する時期の合致、使用者の属性の偏りの合致、「ケレド」類の増加が先行する上方語においても江戸語と同様に逆接ではない話題提示的な用法はほぼ見られないことなど、共通の時代的特徴と思われる現象も発見された。この成果は、5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕として公表した。

(3) 上記(1)(2)の成果をまとめることによって、この研究課題を追究するに当たり、時代的に先行する近世前中期上方語の逆接接続助詞の実態に不明な点があり、その詳細を把握した上で進める必要があることが分かった。そこで接続詞的形式を中心とした調査を進める計画を変更し、先行する時代の接続助詞調査を優先的に実施することとした。先行研究と重なるところもあるが、比較のためには、研究代表者が江戸語・東京語に対して行ってきたものと同様の分析視点によって、近世前中期上方語を精査する必要がある。そのためまずは近世前期の上方語の逆接条件表現の実態について追究した。

逆接条件表現史研究においては、従来の形式「ドモ」から派生した「ケレド」類の成立史に着目した研究は多く見られるが、これにもう一つの代表的形式である接続助詞「ガ」を並べた研究は見られない。このことに着目し、中世後期からつながる時代である近世前期の資料を対象として、「ドモ」「ガ」「ケレドモ」についての調査考察を行った。資料は

上方で出版された断本である。その結果、明らかになったことは以下の通りとなる。

逆接条件表現において、近世前期の「ドモ」は使用率も形態的特徴も中世後期と大きな差はなく、近世後期に至るまで特に衰退傾向とは思われない。これを受けて、「ガ」は中世後期に見「ドモ」を押して進出したように思われるが、逆接条件表現の変化とは異なる固有の背景により当該の表現に進出したものであり、「ドモ」の衰退に伴う進出ではないことを指摘した。そして「ドモ」が明らかに衰退するのは「ケレドモ」が確立した時期まで待つことを改めて確認した。

このことは、条件表現史研究全体の中で考えるべき課題を含んでいる。順接条件表現や逆接仮定条件表現が中世後期には従来の形式から新形式へ移行を始める中で、逆接確定条件のみやや遅れて移行したことになる。逆接確定条件の変化にこのような特異な点が見られるのはどのような質的相違によるものか、考える必要がある。複文を構成する接続形式から発達した接続詞の成立経緯を見る上でも、逆接条件表現系ならではの特徴を分析するための重要な観点となると考えられる。この成果は、5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕として公表した。

(4)平成 28 年度に、明治後期から大正期に録音された SP 盤落語レコードの書き起こし資料に触れる機会を得た。明治期以降の東京語、大阪語の話し言葉資料として価値のあるものであり、本研究課題を発展させる資料として有益であると考え、この資料を対象に逆接を中心とした接続表現についての調査を行った。落語の音声が当時の方言資料として貴重であるのはもちろん、落語家が聴衆に話しかける「地」の部分は明治期以降の「標準語」形成の問題においても貴重なサンプルである。そのような観点で分析を行った結果、会話文においては東京、大阪の各地方言の特徴が明確に現れ、「地」においては江戸落語であっても大阪落語であっても、方言的要素が会話文よりも減少した「標準語」的話体が観察された。地域的特徴が明らかな部分と、連動して共通の現象が見られる部分があるという点は、(2)の成果とも関連が考えられる。この成果は、5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕として公表予定である。

(5)現在、人間文化研究機構国立国語研究所の「通時コーパス」プロジェクトでは近世・近代資料のコーパス化が順次進められており、研究代表者は 2016 年からこのプロジェクトの共同研究員となっている。その共同研究の中で、本研究課題の成果と関連する接続助詞を指標とした近世・近代の文体研究を行い、接続助詞が当該時代の文体を分類する指標となることを示した。この成果の一部は 5. 主な発表論文等の〔学会発表〕として発表された。

本研究課題計画当初には見られなかったこのような言語資源が整備されつつあるのが日本語史資料の最新の状況であり、これを有効活用していくことは日本語史研究の今後の発展の上で重要なことと考える。本研究課題に大いに関連する事態であり、調査資料についての当初計画からの見直しが必要となった。そのため、本研究課題に関連する研究を今後も継続していくにあたって、共同研究員としてコーパス開発に関わりを持ちつつ、開発状況に連動して今後の研究を進めていく予定である。現在、近松門左衛門の浄瑠璃台本等の近世資料、明治期小説等の近代資料のコーパス化が進められており、整備状況に応じて順次接続助詞及び接続詞的形式の調査を行うことを考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

宮内佐夜香「落語の「会話」と「地」の東西比較 接続辞使用傾向から見るスタイル」、金沢裕之・矢島正浩編『SP 盤落語レコードが拓く近代日本語研究』笠間書院、2018 年刊行予定・編集中、査読無、掲載ページ未定(19 頁)

宮内佐夜香「逆接確定条件表現形式の推移についての一考察 中世後期から近世にかけて」、青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究 3』ひつじ書房、2016 年、査読無(査読に準ずる编者コメントによる改稿有り)、pp.111-130

宮内佐夜香「近世後期における逆接の接続助詞について 上方語・江戸語の対照」、『中京大学文学会論叢』第 1 号(通号第 34 号)、査読無、2015 年、pp.(45)-(63)

<http://id.nii.ac.jp/1217/00000286/>

〔学会発表〕(計 2 件)

宮内佐夜香「多変量解析による文体検討の試み 近世・近代資料を対象に」、「通時コーパス」プロジェクト資料性グループ・語彙・意味グループ合同研究会、東洋大学、2018 年 2 月 22 日

宮内佐夜香「江戸語・東京語における逆接の接続詞 形式の推移と用法」、第 67 回中部日本・日本語学研究会、刈谷市総合文化センター、2014 年 4 月 26 日

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮内 佐夜香 (MIYAUCHI, Sayaka)

中京大学・文学部・准教授

研究者番号：30508502